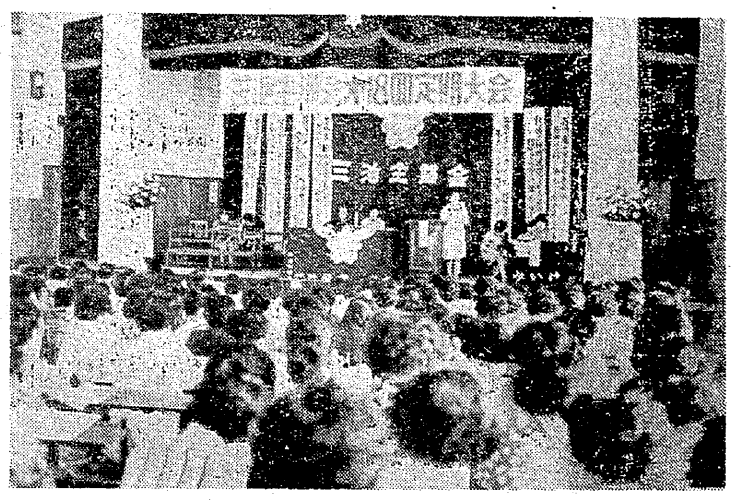


三池主婦会の定期総会

人間の尊厳確立めざす

三池主婦会 定期大会　運動方針を決定

三池炭鉱主婦会は去る十九日、大牟田市民会館で定期総会を開催、「組織を強める」「CO闘争をみんなのものにする」「子供のしあわせを守る」「平和を守るために闘う」「敬老活動を続ける」など、人間の尊厳の確立を目指す、七一年度の運動方針を確立した。

現在三池主婦会の活動は方針が指摘するように「内職や共稼ぎで家計を守るきびしい実態の中で困難を極めて」いる。

それにもかかわらず、諸活動を行ってきた。

中でもCO・遺族闘争ではバンストにまで突入、三池労組とがっちり組んで闘い、その底力を改めて示した。

七一年は、三池主婦会にとっていっそうきびしい情勢となるが、同主婦会は運動方針で「人間が人間として尊重される社会を目指した家族ぐるみの闘いを粘り強く闘い続ける時、必ずや全国の働く仲間に受けつがれ、三池の火は広がってゆく」ことを確信し、闘うことを誓っている。

新役員

三池主婦会定期大会は新しい役員を選出したが、それは次の人々である。

会長　久保　時江　三川
事務局長　島　フミエ　港務
組織部長　中島　静子　宮浦
（会計を兼務）
会計監査　徳永　信子　四山
〃　梅崎　遊久　本所
宮浦支部長　岡本タツエ
四山　〃　古閑　美子
三川　〃　稲井　幸子
本所　〃　田中　松枝
港務　〃　大石知恵子

母親大会に参加して

合理化はまず女性に
戦争の恐しさ伝えよう

主婦会三川　稲井　幸子

私は、菊川五百子さん（四山支部長）と二人三池主婦会の代表となって、日本母親大会に参加しました。

私の感じでは母親大会が、これまでの大会のように職場の問題や、政治への不満を訴えるだけで、それらの問題にどう対処するかということまで至っていなかったように思われたのと違って、要求をし行動をどう起こすか、というところまで実を結びつつあるように思えました。ますます母親大会が前進するように、私たちは一つずつ目的を達成しなければならないと思います。

襲いかかる合理化

私は「働く婦人の問題」のうちで「合理化と労働災害」の分科会に出席しました。

はじめ私がCO・遺族の問題について「遺族やCO患者家族の人たちは、生活の苦しさからまったく無権利な状態の職場で働かねばならない。資本はもうけることばかり考えて、保安対策をおこたるために労働災害や公害をつくり出している。食品公害、交通事故などすべて、政治のまずさから起きている。私たちのようにお金をもたない者は、そんな場合十分安心して治療ができるように、政府にさせなければならない」と訴えますと、それからいろんな人から訴えが出されました。

都市交通の方が、「電車やバスが九五%ワンマン運転になり、運転工はノイローゼ、胃腸病が多くなり、それで休けい時間は賃金を出さない。生理休暇は二〇%カットされるが、皆が抵抗して全員休暇をとるようにしている」と話されました。

国鉄では二十一万人首切り合理化計画が打ち出されていて、思想攻撃がはなはだしくかけられてきており、その攻撃のはじめは必ず女性にかけられてくる、それで働き続けるそのことがいまま反合理化闘争の一つになっている、との報告もありました。

丸の内には外国商社が集っているそうですが、マージャンなどに労働者を誘っては文句のいえない人間にしたり、特定の人を昇格したりして闘えない労働組合にしよう、としているということでした。

職場の不満を出し合って要求している。その結果、妊婦はすぐ医者に見せるようにできたし、お茶わかしなどもかわってもらうようになった」とのことでした。

そのほか「学習をして、実態を正しくつかんで要求して行かねばならない」「未組織労働者の賃金が、組織労働者の賃金の足をひっぱっているから、組織づくりをしなければならない」「婦人が働く意義をよく見つめて行くこと」――など、沢山の発言がありました。

職業病から自殺へ

職業病のことも問題になりました。けんしょう炎患者のことが訴えられ、キイパンチャ病にかかれば箸をとることができなくなる。そのために大日本スクリーン勤務の大村さんという人は、自殺にまでも追いこまれていったという話でした。

熊本交通の女性の方は、「一分間話し合いをやっている。そこで職場の不満を出し合って要求している。その結果、妊婦はすぐ医者こそ労働基準法をよく勉強して、実のある対策をたて、全国の婦人労働者が手をにぎって闘わなければならない時がきたと思う」

異常出産三分の一

助言者の桜井絹江さんは話されました――

「合理化は、まっ先に女性にかけられる。本質は資本の利潤追求のためのもので、労働者はますます仕事を奪われたり、健康を害されたり、仕事がいそがしくなったりする。七〇年代はスピードアップ、人員削減、労働基準法改悪――ということになる。

現在、女性は三分の一は異常出産・流産している。結婚したらやめさせ、そして中高年層の女性をパートや臨時で働かせる。その上にドル・ショック。賃金切り下げや首切りは必ずやってくる。いまこそ労働基準法をよく勉強して、国のために命を捧げるように教えこまれていた。だから夫が出征する時に、涙も見せられないで立っている妻をよく見ましたし、原爆に傷つき、薬がなくて手当ができず、傷口にはうじ虫がはいまわる状態の中で死んで行く子どもは、東の方に向かって手を合わせ、海ゆかば……のうたをうたって死んで行きました。

中央教育審議会の答申には、教育のことは国家がきめることが書かれています。闘う余地があるいまこそ、闘わなければならないと思います」

私たちは、「婦人労働者としての意識を一層高めよう」など十四カ条のまとめを確認して大会を終わりましたが、皆がやろうとさえ思うならばできることだということをつくづく感じさせられました。

海ゆかばうたうな

大会では家永先生の話がありました――

「戦争に生き残った者として、戦争がいかに恐ろしいものか。戦前の教育が、いかに恐ろしいものだったか、ということを、戦争を知らない者に伝えねばなりません。

戦前の教育は、国家の役に立つ人的資材とするためのものでした。社会の、さまざまな役に立たせるために、兵隊でいうならば上官・兵隊と差別をして教育しました。それは、教育内容を、国家が完全ににぎっていた、国家の役に立つための教育内容にきめていた小学校・中学までも国定教科書にしていた、とくにその中での母親の役割を、『一太郎ヤーイ』『水兵の母』とされていました。

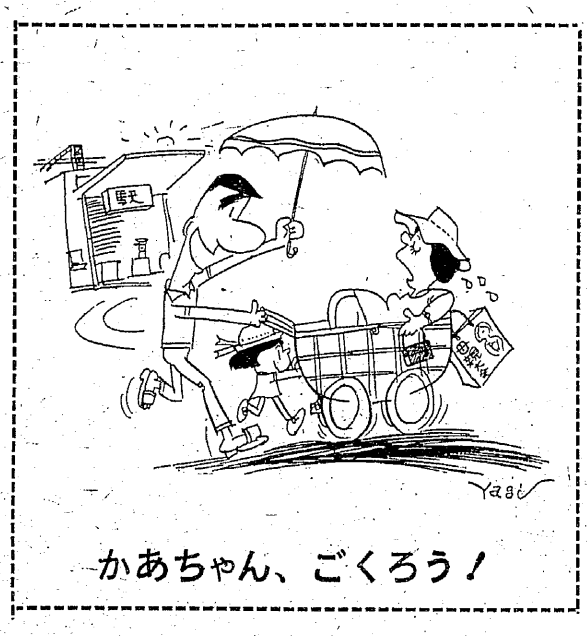
母親は、肉親を戦死で奪われ、動員により広島で働かされていた子ども達は、子どもの時から、知らず知らずのうちに、よろこんで国のために命を捧げるように教えこまれていた。だから夫が出征する時に、涙も見せられないで立っている妻をよく見ましたし、原爆に傷つき、薬がなくて手当ができず、傷口にはうじ虫がはいまわる状態の中で死んで行く子どもは、東の方に向かって手を合わせ、海ゆかば……のうたをうたって死んで行きました。

中央教育審議会の答申には、教育のことは国家がきめることが書かれています。闘う余地があるいまこそ、闘わなければならないと思います」

私たちは、「婦人労働者としての意識を一層高めよう」など十四カ条のまとめを確認して大会を終わりましたが、皆がやろうとさえ思うならばできることだということをつくづく感じさせられました。

×

日本母親大会は、八月二十九日～三十日の二日間にわたって、東京の日大講堂を中心に開催され、全国から約一万人の母親たちが参加しました。



蛙の子は蛙だった

月見ケ丘　鶴田都己

今年十九才になった次男から、久し振りに便りが届き、組合結成の喜びを知らせて参りました。

就職した先の企業に組合がなかったので、次男は労働者としていろいろの点で不利を感じ、どうしても組合をつくらねば、と帰省もしないで総評のオルグを招き、会社に対しては組合結成までマル秘で仲間同志が集まって学習をしている、と便りがあって一年めのことでした。とうとう組合結成にこぎつけ、団交ももったとか。その文面に、「おかあさん、ぼくはやっぱり蛙の子でした」と書いてありました。

昭和二十七年の一月二十八日、この世に生を受けたこの子は、あの二十八年の企業整備反対闘争の時から、労働歌を子守り歌代りに聞きつつ育ち、闘いの苦しい生活の中で労働者としての生き方を身につけ、やがて青年にまで成長しました。そしていま遠い埼玉の地にて、若者らしく、自からの手で労働組合をつくった喜びをかみしめているのです。

しかし、これからが大変なのです。苦しくとも正しい道を歩き、働く者の命の尊さを学び、人間が人間らしく生きられる世の中を築くためにこそ頑張ってほしいと、親として願いつつ、おかあさんも共に頑張ることを、いま改めて貴方に誓いたいと思います。

鶴田さん

ソフトボール大会にぎあう

宮前地域分会で

宮前地域分会は三池主婦会同分会といっしょに、九月十二日（日曜）勝立グラウンドで〝家族ぐるみソフトボール大会〟を開催。

この大会は、組合員だけ三チームを編成してぶつかり合ったばかりでなく、組合員対中高青年子弟チーム、主婦対小学チーム（中女を含め）でもぶつかり合い、組合員対中高青チームが一勝一敗、主婦対小学チームは十二対十一と大接戦を演じて主婦側に軍配があがった。

この日の勝立グラウンドは、新労同地域分会も借りていた（バレーボール大会）ため二重借りとなり、話し合いの結果三池労組分会が午前中、新労分会が午後に使用することに話がついていたところ新労分会から「折角だからお宅の方で一日中ゆっくり使ってください。私の方は別のところで開催しますから」と、うれしい申し出があり、地域分会はおかげで心ゆくまで一日を楽しむことができたのだった。

各指導部へお願い

各指導部で、これからいろんな催しがあることと思います。できるだけ本紙で知らせ、交流をはかりたいと思いますので、編集部へご連絡下さい。